

ヒューム『人間本性論』第1巻における 印象と観念の区別について

伊佐敷 隆弘

Hume on the Distinction between Impressions and Ideas in *Treatise*, Book I

Takahiro ISASHIKI

要 旨

ヒューム『人間本性論』第1巻「知性論」における「印象」と「観念」の区別が持つ意味について考察する。

「ヒュームに『一般印象』なるものがないのはなぜか」を検討すると、「印象の消滅的性格と観念の持続的性格」という違いが浮かび上がる。今自分の心に現れている単純印象が何であるかを知るために名辞は不要だが、単純印象の再認が必要である。しかし、印象は消滅的であるから、単純印象の再認のためには持続する単純観念が不可欠である。単純印象が単純観念へ正確にコピーされることはヒュームの大前提なので、ウィトゲンシュタインの「感覚日記」の問題はヒュームにおいて起こらない。また、セラーズからヒュームに対する「所与の神話」という批判は、ヒュームが基礎付け主義者でないが故に、当たらない。人間の経験的知識は、知の知を伴う点で動物の知識と異なるが、現前する印象から連合する観念への推移としてのヒューム型推論は動物も人間も行なう。印象の「消滅的性格・操作不可能性・勢いの強さ」という特徴は、経験の〈現実性〉、即ち、「経験は〈今〉〈ここ〉において起こるその都度のものである」、「経験に対して心は受動的である」、「経験は心を動かす強い力を持つ」などの特徴の反映である。しかし、経験の〈現実性〉は印象から観念へコピーされない。

結局、ヒュームにおける印象と観念の区別は二つのことを明らかにする。第一に、それは、経験の持つ〈現実性〉を際立たせ、同時に、経験の〈現実性〉が思考の対象になりえないということを明らかにする。第二に、それは、経験から知識が生成してくる原点が「消滅的なものと持続的なものの類似」にあるということを明らかにする。

はじめに

ヒュームは、ロックやバークリーが「観念 (idea)」と呼んでいたものを、さらに「印象 (impression)」と「観念」の二つに分ける。しかし、ヒュームの「印象」には何か概念的把握を拒むような側面があるように思われる。同時に、「印象」は、経験それ自体の持つ現実性と強く関連しているようにも思われる。本論文では、ヒュームにおける「印象」と「観念」の区別が持つ意味について考察する。

ただし、ヒュームの言う「印象」は多様である。即ち、「感覚の印象」、「快と苦」、「美醜の感受」、「情念」、「意志」、「心の被決定性¹⁾」、これらはみなヒュームによって「印象」に分類されている。しかし、本論文では、主に『人間本性論』第1巻「知性論」をテキストとし、「感覚の印象」だけを議論の対象とする。

まず、「なぜ『一般印象』なるものはないのか」という問いを通して、「印象の消滅的性格と観念の持続的性格」という対比を取り出す(第1節)。次に、「今自分の心に現れている単純印象が何であるかを知るために何が必要なのか」を検討し、名辞は不要だが、単純観念は不可欠であることを示す(第2節)。続いて、ヒュームに対するセラーズからの批判を取り上げ、動物と人間の知識の連続性と断絶について検討する(第3節)。最後に、「印象から観念へのコピーの際に、何がコピーされ、何がコピーされないのか」を検討し、現実性と知識について考える(第4節)。なお、「付論」として「記憶の印象」に関して、本論文の議論との整合性を検討する。

1. 印象と観念の違い：なぜ「一般印象」なるものはないのか。

(1) 勢いの程度の違い

「印象」や「観念」とはいかなるものか。ヒュームは次のような例を挙げる。今、私の眼にはこの部屋の様子が現れている。さまざまな印象が私の心に現れている。これは視覚を通して与えられている印象である。次に、眼を閉じよう。すると、さきほどの印象はすべて失われる。しかし、さきほどまで見えていたこの部屋の様子を思い浮かべることができる。このとき、先ほどの印象に対応する観念が心に現れている([T1-1-1, p.3]²⁾)。そして、ヒュームは、「印象」と「観念」の違いは「勢い³⁾の程度 (degree)」にあると言う。即ち、「暗闇で作られる赤色の観念と、太陽の光のもとで私達の眼を打つ赤色の印象とは、勢いの程度を除けばその性質 (nature) に違いはない」と言う([T1-1-1, p.3])。勢いは弱くなるけれど観念は印象を正確に再現するという点である。結局、印象と観念とは、どちらがオリジナルなのかという点を除けば、程度の違いしかないことになる。実際、ヒュームがはっきりと「印象と観念の違いは勢いの程度の違いだけだ」と言っている箇所([T1-3-7, p.96],[T1-3-10, p.119])もある。要するに、印象と観念の違いとして、ヒュームは次の①②の二つを指摘しているのである⁴⁾。

印象と観念の違い①：勢いの程度。(観念とは弱くなった印象。)

印象と観念の違い②：観念は印象のコピー。(印象が観念に先行。両者は正確に類似。) ところで、一般観念について、ヒュームは、ロックの抽象説を退け、バークリーのいわゆる

代表説を支持する。ロックの考えによると、直角三角形や正三角形のような色々な三角形の観念から、心は抽象によって、どの三角形にも当てはまる新たな一つの観念を作り出す。これが「三角形」という一般名辞に対応する「三角形」という一般観念である（『人間知性論』2巻11章9節、3巻3章6節）。これに対し、パークリーは一般観念を作り出す抽象という心の働きを認めない。「三角形」という一般名辞が表すのは実は特定の三角形の観念であり、ただ、この個別観念⁵⁾が他の様々な三角形の個別観念を代表する（stand for, signify, represent）働きを持つようになるのだとパークリーは考える（『人知原理論』「序論」12節）。そして、ヒュームは、さらに、この代表する働きが個別観念の間の習慣的な連合に由来するということを指摘する。結局、一般観念とは、ヒュームにとって、次のようなものである（[T1-1-7, pp.21-22]）⁶⁾。

一般観念：他の類似の個別観念を思い出させる習慣を伴う、一般名辞とむすびついた個別観念。

さて、以上を踏まえて次の問いを立てよう。

問い：なぜ「一般観念」はあるのに「一般印象」はないのか？

ヒュームの『人間本性論』に「一般観念」は登場するが、「一般印象」は登場しない。それはなぜなのか、という問いである。この問いは馬鹿げた問いに見えるかもしれない。「ロックもパークリーも一般観念を問題にしたのであって、ヒュームはその用語を素直に引き継いだだけだ」と思われるかもしれない。しかし、ロックやパークリーが一括りに「観念」としたものを、ヒュームはさらに「印象」と「観念」に分けたのだから、「観念」という用語の意味の広さは彼らの間で異なる。つまり、ヒュームは一般観念について議論する場所をロックたちよりも限定したということである。上の問いはその限定の理由を問題にしているのである。したがって、用語の一致を理由にこの問いを退けることはできない。

しかし、上記の印象と観念の違い①②はこの問いに答えていない。印象と観念の違いが程度の違いに過ぎないのなら、一方にできることはもう一方にもできる筈である。「一方について真であることは他方についても真」（[T1-1-7, p.19]）になるはずである。

上の一般観念の定義の中の「観念」という語を「印象」に換えてみると次のようになる。

一般印象：他の類似の個別印象を思い出させる習慣を伴う、一般名辞とむすびついた個別印象

このような「一般印象」なるものがあってはならない理由を①②は与えていない。勢いが強いと代表する働きを持たないのか。しかし、勢いが違って、印象と観念は正確に類似しているのだから、観念どうしが類似できるなら、印象どうしも類似できることにならないだろうか。それなら、類似する他の印象を思い出させる習慣が形成されてもよいのではないだろうか。また、コピーにできることはオリジナルなら一層うまくできそうにも思われる。

しかし、『人間本性論』には「一般印象」なるものはまったく登場しない。そのことは何を意味するのか。それは、印象と観念の違いが①②以外にもあるということである。では、どんな違いか。

(2) 消滅的か持続的かという違い

未知の原因から印象は起こるとヒュームは言う（[T1-1-2, p.7]）。印象が起こる原因は、心の外の対象なのか、心自身の力なのか、神なのか、不明だと彼は言う（[T1-3-5, p.84]）。しかし、印象は、その未知の原因が働いている間だけ持続するのだと考えられる。そして、印象

は一旦なくなったら二度と現れることはない。印象が再び現れるときは、もう印象ではなく、観念として現れる（〔T1-1-3, p.8〕）。そして、観念は印象が消えた後も持続する（〔T1-1-2, p.8〕⁷⁾。このように、印象は消滅する存在（perishing existence）（〔T1-4-2, p.194〕）であり、他方、観念は持続する存在である。そして、心はそれらの観念をいつでも呼び起こす力を持っている（〔T1-1-3, p.10〕,〔T1-2-5, p.60〕,〔T Appendix, pp.623-624〕）。心は想像力によって、観念を分けたり、結びつけたり、いろいろな操作を観念に対して行なう。これは、空想のように恣意的に行なわれることもあれば、観念連合のように或る程度否応なしに生じることもある。しかし、すぐに消滅してしまう印象に対して心は無力である。心は印象を操作することはできない。このように、印象と観念には消滅的と持続的という違いがあり、さらに、この違いから操作不可能と操作可能という違いも出て来る。

印象と観念の違い③：印象は消滅的／観念は持続的。→ 印象は操作不可能／観念は操作可能。

さて、この違い③を踏まえれば、「一般印象」なるものがない理由も今や明らかである。

一般印象とは、「他の類似の個別印象を思い出させる習慣を伴う、一般名辞とむすびついた個別印象」なるものだった。しかし、第一に、心は印象を操作することができないから、印象どうしの中に習慣的連合は形成されない。習慣的連合は常に観念の間に形成される。習慣は持続的なものであるから、すぐに消滅してしまう印象に関して習慣は形成されえない。第二に、同じ理由から、印象と名辞をむすびつける習慣的連合も形成されない。そもそも、名辞を聞いても心に観念は現れるが、印象は現れて来ない。「りんご」という名辞を聞いてもりんごの観念は現れるが、りんごの色が見えてきたり、りんごの味がしたりすることはない。要するに、「観念連合」や「観念と名辞の間の連合」はあるが、「印象連合」とか「印象と名辞の間の連合」というものはありえない⁸⁾。それゆえ、「一般印象」もないのである。結局、「一般印象」なるものがないのは、印象の消滅的性格および操作不可能性のゆえである。

ヒュームは「勢いの程度の違い以外に印象と観念の違いはない」と言うが、印象と観念には「消滅的と持続的」という違いもあるのである。しかし、この違いは実は『人間本性論』の冒頭に既に現れていると言える。それは、印象と観念の違いは「感じること（feeling）と考えること（thinking）」の違いと同じだとヒュームが言っている箇所（〔T1-1-1, p.2〕）である。感じられる対象である印象が消滅的であり、考えることの対象である観念が持続的だということは、ヒュームにとって改めて言うまでもないほど当然のことだったのだろう⁹⁾。

こうして、我々は、ヒュームに「一般印象」なるものがないということを手がかりに、印象と観念の違いとして、「消滅的と持続的」、さらに、そこから帰結する「操作不可能と操作可能」という違いを取り出すことができる。

2. 単純印象の認知

(1) 単純印象の名前

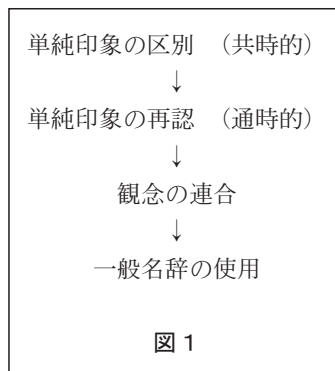
ヒュームは、印象をさらに単純印象と複雑印象に分類し、他方、観念をさらに単純観念と複雑観念に分類する。単純印象や単純観念は部分への区別や分離ができないのに対し、複雑印象や複雑観念は部分への区別または分離ができるという違いがある（〔T1-1-1, p.2〕）。そして、具体例として、「りんごの印象は特定の色や香や味に区別できるから、複雑印象だ」とヒュー

ムは言う（〔T1-1-1, p.2〕）。それでは、色の印象は単純印象なのか。ヒュームはそのような言い方をする。例えば、本論文第1節(1)で挙げた「暗闇で作られる赤色の観念と、太陽の光のもとで私達の眼を打つ赤色の印象とは、勢いの程度の差を除けばその性質に違いはない」という例（〔T1-1-1, p.3〕）は、実は、単純印象と単純観念が正確に類似する例としてヒュームが挙げているものである。しかし、本当に赤の印象は単純印象なのか。赤いりんごが眼の前にあるとしよう。一口に「赤いりんご」と言っても、よく見ると表面には微妙な赤のグラデーションがある。このりんごを絵に描く場合、赤のクレヨン1色で全体を塗りつぶしたら、私達の眼に実際に見えているりんごとは随分違うものになるであろう。実際、りんごに限らず、赤には様々な色合いがある。濃い赤と薄い赤、濃さの程度も様々である。黄色がかった赤、紫がかった赤、ピンクがかった赤、様々な赤がある。さらに、表面のきめによっても違って見える。りんごのようなつるつるした表面の赤と布の表面の赤とは同じ濃さの赤であっても違ったふうに見えるだろう。結局、「赤の印象」という呼び方は、多くの異なる単純印象に当てはまる一般名辞だと考えられる。

しかし、異なる単純印象が「赤」という同じ名前と呼ばれていても、それらが違って見える以上、心はそれらの単純印象を互いに区別できている。つまり、感覚の分解能は言語の分解能よりもはるかに精密である。視覚以外の他の感覚についても同様であろう。つまり、単純印象と1対1に対応する名辞は実際には存在しないと思われる。しかし、それぞれの印象を何と呼ぶのか、その名前は知らなくても、(或いは、その名前がそもそもなかったとしても)、感覚は、それぞれの印象を互いに区別することができる。とすれば、今どんな単純印象が自分の心に現れているかを知るためにその単純印象の名前を知っていることは必ずしも必要ではないということになる。言い直せば、単純印象の認知に言語は不要だということである。

(2) 単純印象の再認

しかし、単純印象の名前は知らなくても、その単純印象を再認できることは必要であろう。その理由を以下説明する。次の図1にあるように、自分の心に現れている単純印象に関する認知には、4つの段階があると考えられる。



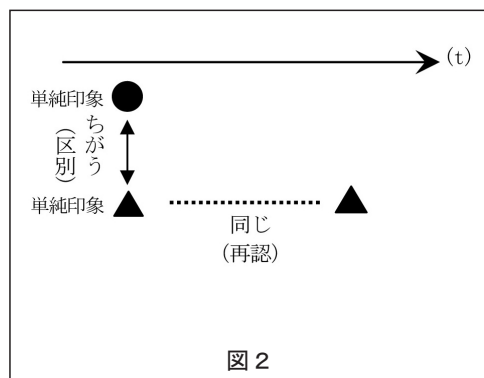
まず、第1の段階は、別々の単純印象を区別できる段階であり、例えば、りんごの表面のさまざまな色合いの赤が見分けられる段階である。第2の段階は、同じ色合いの赤の単純印象を再認できる段階である。第3の段階は、さまざまな色合いの赤を同じグループに属するものと

みならず段階であり、これは観念連合が形成されている段階である。そして、最後の第4段階として、「赤」という一般名辞を用いて、今現れている単純印象を記述できる段階が来る。このように、単純印象に関する認知には、区別→再認→観念連合→一般名辞という4つの段階を考えることができる。

前述のように、どんな単純印象が自分の心に現れているかを知るために名辞の使用は必要ではないから、第4段階まで達している必要はない。しかし、逆に、第1段階の「別々の単純印象を区別できる」だけでは足りない。少なくとも第2段階まで到達している必要がある。なぜか。

まず、「単純印象の再認」とはどういうことか。ここにりんごがあるとしよう。表面の様々な色合いが区別されて見えている。即ち、多様な単純印象が心に現れている。次に、眼を閉じる。先ほどの多様な印象はすべて失われる。再び眼を開ける。「同じりんごだ」と分かる。今現れている印象がさっき現れていた印象と同じだと分かる。つまり、りんごの複雑印象を構成する多数の単純印象のそれぞれを再認できたということである。もっと単純な例として、りんごの代わりに色紙を使おう。或る特定の色合いの赤い色紙を眼の前に置き、一度見て、眼を閉じ、また眼を開ける。「同じ色だ」と分かる。つまり、或る特定の色合いの赤の単純印象を再認できたということである。

単純印象の区別と再認について、次の図2を用いて説明する。



この図の横軸は時間の流れを表し、●や▲は単純印象を表す。第1段階の単純印象の区別というのは、或る時点において同時に現れている異なる単純印象（左側の●と▲）を区別できるということである。一方、第2段階の単純印象の再認というのは、右側の▲（即ち今現れている単純印象）が左側の▲（即ち過去に現れた単純印象）と同じであることが分かるということである。

もし単純印象の再認がまったくできない人がいたらどんな風か想像してみよう。その人は、今見えている色が眼を閉じる前に見えていた色と同じなのか異なるのか、まったく分からない人である。どんな色に関してもそうなのである。例えば、その人の前に、まず、赤と青の2枚の色紙を並べる。その人は、それらの色が異なるということは分かる。区別はできるのである。次に、その人に眼を閉じてもらう。それから、すぐに、眼を開けさせる。2枚の色紙はまだそのままその人の眼の前にある。しかし、このとき、その人は、眼の前の2枚の色紙の色が互いに違うことは分かるのだが、この2枚の色紙の色が眼を閉じる前に見えていた2枚の

色紙の色と同じなのかどうかは分からないのである。再認できないのである。だから、もし、この人が眼を閉じている間に、赤と青の色紙を、別の色（例えば、黄色と緑）の色紙に取り替えたとしても、その人は眼を開けた後、（眼の前にある2枚の色紙の色が互いに異なることは分かるが、）色紙が取り替えられたのか否かまったく分からない。このように、この人は色の区別はできるけれど、再認ができない人なのである。実際にはこのような人はいないだろうが、仮にこのような人がいたとしたら、この人について、「この人はどんな単純印象が自分の心に現れているかを知っている」と言うのは困難であろう。

このように、特定の色合いの赤の単純印象が今自分の心に現れていることを知っているためには、（その特定の色が「赤」というグループに属することや、「赤」という名前で呼ばれることは知らなくとも、）同じ色合いの赤の単純印象が再び現われたときに同じ単純印象だということを再認できることが最低限必要であろう。要するに、自分の心に今現れている単純印象が何であるかを知っているためには、第1段階の「区別」だけでは足りず、第2段階の「再認」が最低限必要だということである¹⁰⁾。

(3) 単純印象から単純観念へのコピー

しかし、第1節で述べたように、印象は消滅する存在であるから、過去の印象と現在の印象を直接比較することは不可能である。即ち、先の図2では、今現れている単純印象（右側の▲）を過去に現れた単純印象（左側の▲）と直接比べることができるかのように描いているが、印象の消滅的性格を踏まえれば、図2は次の図3のように修正されなければならない。

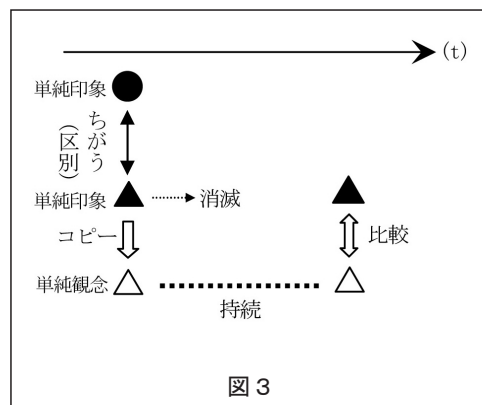


図3

図3の△は単純観念を表す。過去に現れた単純印象（左側の▲）は今は消滅しているから、今現れている単純印象（右側の▲）と直接比べることはできない。しかし、過去の単純印象（左側の▲）のコピーである単純観念（△）が現在に至るまで持続しているから、この単純観念（△）と今現れている単純印象（右側の▲）を比較すれば、単純印象の再認が可能になる。赤の例で説明すれば次のようになる。特定の色合いの赤の単純印象が対応する単純観念を生む。（単純印象から単純観念へのコピー）。そして、前者が消えた後も後者は残る。（観念の持続的性格）。この持続的な単純観念を介して、消滅した過去の単純印象と現在の単純印象との同一性を心は知ることができる。このようにして、同じ色合いの赤の単純印象の再認が実現する。

要するに、自分の心に今どんな単純印象が現れているかを知っているためには、単純印象の

再認が必要であり、そして、そのためには、過去の単純印象の正確なコピーである単純観念の存在が不可欠なのである。

(4) ウィトゲンシュタインの「感覚日記」との比較

単純印象の再認とウィトゲンシュタインの「感覚日記」(『哲学探究』 §256～§261)を比較してみよう。結論から先に言うと、ヒュームの場合、「単純印象から単純観念へのコピーの正確さ」、および、「単純観念の通時的同一性」が前提されているから、ウィトゲンシュタインの言う「感覚日記」の問題はヒュームにおいて起こらない。

次の図4を用いて「感覚日記」の問題を説明する。

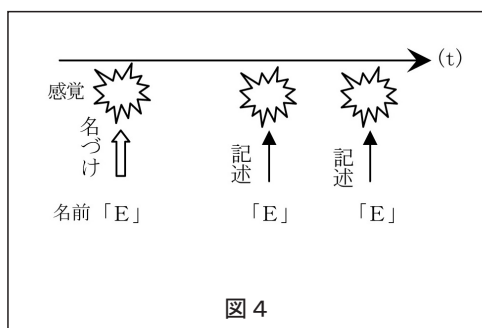


図4

私が或る感覚を感じた日に日記に「E」というアルファベットを書き込む。この「E」という名前は私が発明した名前である。つまり、私はその感覚にはじめて名前を付けたのである。さて、次の日にまた或る感覚を感じ、「あ、Eが起こった」と思った私は日記に「E」と書き込む。今度は昨日発明した「E」という名前を使って今日起こった感覚を記述したわけである。ウィトゲンシュタインが問題にするのは、最初の日に、その感覚に私が「E」という名前を付けたときに、この名前とその感覚はどうやってつながったのか、ということである。つまり、「名付けるだけで、名前と感覚はつながるのか。名前と感覚がつながるためには、名付けること以外に、感覚に伴う身体的振る舞いとか、感覚が生じる前後や周囲の出来事とか、色々なことが必要なのではないか」とウィトゲンシュタインは言いたいのである。例えば、歯の痛みを例にとれば、痛みの感覚以外に、「押すと痛みが強まる」、「冷たいものがしみる」、「腫れている」、「熱っぽい」、「鎮痛剤で痛みが弱まる」などの原因や結果や前後周囲で生じる出来事がある。もし、これらの出来事が一切なくて、ただあの痛みの感覚だけが生じているとしたら、その感覚に名前を付けるだけでその名前と感覚のつながりを作り出すことはできないのではないかとウィトゲンシュタインは主張したいのである¹¹⁾。

ウィトゲンシュタインのこの主張をどう評価するにせよ、単純印象と単純観念のつながりに関して同じ問題は生じない。先の図3と図4を比べてみよう。図4の名付けと図3のコピーとでは矢印の向きが逆になっている。図4の感覚日記の例において感覚と名前「E」の間には何の類似性もない。これに対し、図3の単純印象と単純観念が正確に類似していることはヒュームの議論の大前提である。昨日のあの感覚と名前「E」の間につながりができていなければ、今日私が「E」という名前を使ってもこの名前が何を意味するかは確定していないことになるが、一方、単純観念は単純印象の正確なコピーであるから、今私の心にあるこの単純観念がど

のような単純印象と一致するかは確定している。だからこそ、単純印象の再認の際にこの単純観念は有効に働くのである。このように、「単純印象と単純観念の正確な類似」という前提のもとでは「感覚日記」の問題は生じない。(ただし、「単純印象と単純観念の正確な類似」については第4節で再度検討する。)

本節の結論は、「単純印象の認知に名辞は不要だが、単純観念は不可欠である」ということである。この考え方の前半の「名辞は不要」という部分をセラーズは批判した。次の第3節で検討する。

3. 動物の知識と人間の知識

(1) セラーズによる「所与の神話」批判

セラーズ ([Sellars 1956]) は、自分の心に今生起している感覚経験が何であるかを知るためには言語が必要であると主張し、「感覚経験の生起がそのまま知識の獲得であり、かつ、そのような知識がすべての経験的知識を基礎付ける」という考え方を「所与の神話 (Myth of the Given)」と呼んで批判した。セラーズの直接の標的は20世紀前半のセンスデータ論者だが、彼は、同時に、ロック・バークリー・ヒュームの名前も挙げて批判の対象にしている¹²⁾。セラーズの批判する「所与の神話」は互いに関連する二つの主張からなる。一つは、「非言語的直接知のテーゼ」、即ち、「言語を前提しなくても、感覚経験の生起がそのまま知識の獲得になりうる」という主張¹³⁾であり、もう一つは、「基礎付け主義のテーゼ」、即ち、「そのような非言語的直接知があらゆる経験的知識を最終的に正当化する」という主張である。セラーズの「所与の神話」批判をめぐる様々な議論があるが、ここでは、動物の知識という側面から検討する。

(2) ヒューム型推論とアリストテレス型推論

ヒュームは、単純印象の認知以外にも、言語なしで可能な心的活動をかなり広い範囲で認めている。例えば、彼は、「類似・近接・因果という観念連合を導く3つの関係は動物に対しても人間に対してと同様に作用する」と言う ([T2-1-12, p.327])。そして、「犬が燃えている火を避けるのは熱を推理するからであり」、また、「犬は主人の声の印象から主人の怒りを推理する」と言う ([T1-3-16, pp.177-178])。このように、ヒュームは動物にも印象・観念・観念連合・推論を認める。

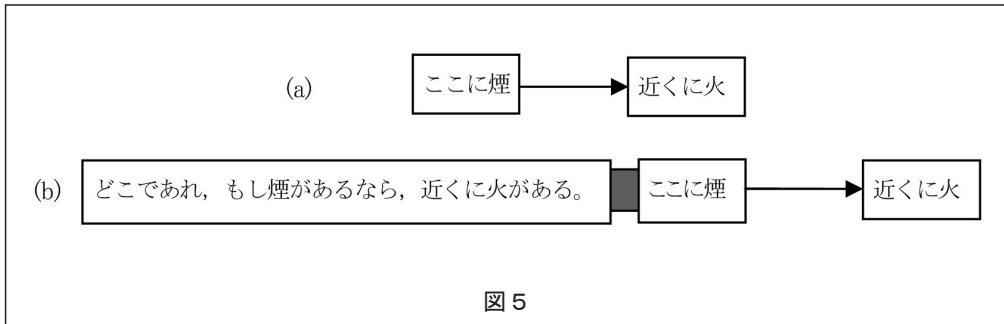
セラーズは非言語的直接知を認めないのであるから、言語を持たない動物は経験的知識を持たないことになる。「動物に経験的知識を認めないのはおかしいのではないか」という批判 (例えば、[Meyers 1981, pp.72-74]) に対し、セラーズ ([Sellars 1981, p.325]) は、「心的出来事はみな言語的出来事だ、と私が考えているというのは誤解だ」と弁明し、言語を持たない動物でも経験的知識を持てることを認めるに至る。ただし、彼は、言語なしで持てる経験的知識と、言語を前提して初めて持てる経験的知識を区別する。それが、次の(a)と(b)の区別である ([Sellars 1981, pp.340-342])。なお、セラーズの言う「表象システム (representational system)」とは大雑把に言えば「心」のことである。

(a) 動物の表象システム……ヒューム型推論 (印象から観念への推移) を行なう。(言

語は不要)

(b) 人間の表象システム……アリストテレス型推論（論理語や条件文を用いる）も行なう。（言語が必要）

ヒューム型推論というのは、例えば、次の図5にあるように、「ここに煙」という現前する印象から、「近くに火」という連合する観念へ心が推移することである。（ただし、セラーズ自身は「印象」とか「観念」という言葉は使わず「表象状態（representational state）」と呼んでいる。）これに対し、アリストテレス型推論とは、「どこであれ、もし煙があるなら、近くに火がある」という観念と「ここに煙」という現前する印象とから、「近くに火」という観念へ心が推移することである¹⁴⁾。(a)での「ここに煙」から「近くに火」への推移自体が、一般化されて、(b)での「どこであれ、もし煙があるなら、近くに火がある」という条件文になっている。つまり、アリストテレス型推論においては、ヒューム型推論における印象から連合する観念への推移が自覚的に取り出され、さらに、一般化されて、「どこであれ」とか「もし」とか「ならば」などの論理的な語彙によって表現されている。



ヒューム型推論は動物だけでなく人間も行なっている。ヒュームは、「因果判断が依存する過去の経験は気づかれない仕方では心に作用する」と言う（[T1-3-8, p.103]）。つまり、過去における原因と結果の恒常的随伴は自覚的に思い出されることなく、因果判断の際に心に作用しているということである。それゆえ、アリストテレス型推論の場合と違って、ヒューム型推論を行なう際の心は、なぜ、自らの心がそのように推移していくかを自覚せずに、推論している。おそらく我々は、気付かぬうちに、毎日大量の因果判断をヒューム型推論によって行なっていることであろう。

(3) 動物の知と人間の知の連続性と断絶

上記の「ヒューム型推論」と「アリストテレス型推論」の区別から分かるのは、動物と人間の持つ経験的知識の連続性と断絶である。

ヒュームによれば、動物の知は、「印象や観念を持つこと」、「観念が連合すること」、「印象から観念へ推移すること」からなっているが、これらは、言語なしで獲得できる知識であり、動物と人間が共通に持っている知識である。ヒューム型推論が基づいているのはそのような知識である。ここには、動物と人間の持つ経験的知識の連続性が現れている。

しかし、さらに、人間は自らの知識をも知識の対象とする。アリストテレス型推論とは、ヒューム型推論そのものを知識の対象とした上ではじめて可能となる推論である。「知識それ自体を

対象とする知識」というのは、動物の知識にはない特徴であろう。人間の心において、多様な印象や観念が、現れたり、消えたり、分離したり、結合したりしているが、心は、印象や観念のそれらの多様な動き自体を知覚し、「印象」という観念、「観念」という観念を作る（[T1-1-1, p.6],[T1-3-8, p.106]）¹⁵⁾。これは、ロックが「内省（reflection）」と呼んだ心の働きである。ヒュームが『人間本性論』で行なっている営みも内省に基づいている。人間は内省するが、動物はおそらく内省していないであろう。そして、この「知識を対象とする知識」を支える上で言語が大きな役割を果たしていることもおそらく間違いないであろう。このように、人間の持つ知識には、「知識それ自体を対象とする知識」即ち「知の知」を伴うという、動物の知識と断絶している面がある。

(4) ヒュームと所与の神話

結局、ヒュームは所与の神話を信じているのか。

所与の神話は本節(1)で述べたように、「非言語的的直接知のテーゼ」と「基礎付け主義のテーゼ」という互いに関連する二つの主張からなる。確かに、ヒュームは、単純印象の認知のような非言語的的直接知を認めている。単純印象の認知には、正確なコピーである単純観念さえ存在していればよく、名辞の存在は不要である。そして、生起した単純印象は必ず正確に単純観念へコピーされるのであるから、感覚経験の生起はそのまま知識の獲得になる。したがって、ヒュームは「非言語的的直接知のテーゼ」を認めていると言ってよい¹⁶⁾。そして、すべての経験的知識は（知の知も含め）この単純印象の認知があって初めて可能になる。

しかし、にもかかわらず、ヒュームは基礎付け主義者ではない。我々の経験的知識には、「物体」とか「因果」とか「自我」という観念が登場するが、ヒュームによれば、これらの観念は想像力による観念の習慣的連合によって作られたものである¹⁷⁾。しかし、想像力や習慣の働きを他の何かによって正当化することはできないであろう。したがって、経験的知識を単純印象へ遡ることによって当該経験的知識を正当化することもまたできないであろう。

結局、ヒュームは、所与の神話の互いに関連する二つの主張のうちの一方を信じていないのであるから、所与の神話を信じていたとは言えない¹⁸⁾。

第2節で、「単純印象の認知に名辞は不要だが、単純観念は不可欠だ」と述べた。前半部分の「名辞が不要」という点に関してこの第3節で検討した。後半部分の「単純観念は不可欠だ」という点に関して、即ち、「単純印象から単純観念へのコピー」について、次の第4節で改めて検討しよう。

4. 現実性と知識

(1) 痛みの印象と痛みの観念

今、私が或る痛みを感じているとしよう。言い直せば、私の心に或る特定の痛みの単純印象(α)が現れているとしよう。ヒュームによれば、この痛みの単純印象は対応する観念へすぐにコピーされる。即ち、或る特定の痛みの単純印象(α)は或る特定の痛みの単純観念(β)へ正確にコピーされる。私のこの痛みが治まったとき、この印象 α は消え失せるが、痛みの観念 β は残る。しかし、痛みの印象 α の正確なコピーである痛みの観念 β が心に現れているとき

心は少しも痛みを感じていない。もし昨日の激痛を思い出すたびに再び激痛を感じるなら、私たちは大変苦しまなければならぬ。しかし、幸いなことに痛みの観念が心に現れても少しも「痛く」ないのである。したがって、印象から観念への「コピー」と言ってもまったく同じものが現れているわけではない。つまり、 α が α のまま再び現れるのではない。とすれば、或る特定の痛みの単純印象 α がそれに対応する痛みの単純観念 β へ写し取られるとき、何か失われるものがある筈である。では、失われたのは何なのか。コピーされなかったのは何なのか。

(2) 経験の〈現実性〉

先に第1節で印象と観念の違いが取り出された。即ち、観念が持続的であるのに対し、印象は消滅的である。心は観念を操作できるが、印象は操作できない。印象は観念よりも勢いが強い。印象のこれらの特徴は経験それ自体の持つ或る特徴と対応しているのではないだろうか。第一に、経験は常に〈今〉〈ここ〉において起こる「その都度」のものであるが、そのことが印象の消滅的性格に反映しているのではないか。第二に、経験はやって来るもの、与えられるものである。私に今見えているこの景色を私はそのまま受け取るしかない。つまり、心は経験に対して受動的である。ロックは、『人間知性論』(2巻1章25節)の中で、「心は単純観念を拒むことも変えることもできず、新しい単純観念を作り出すこともできない。心は単純観念に対して受動的だ」と言ったが、これを、ヒュームの言う「印象」の操作不可能性の描写として読み替えることもできる。つまり、「心は印象を拒むことも変えることもできず、新しい印象を作り出すこともできない。心は印象に対して受動的だ」というふうなのである¹⁹⁾。第三に、経験は私を動かす。無論、私は人間が作り出した虚構によって動かされることもあるが、経験が私を動かす力は一層強く否定なしのものである。経験の持つこれらの特徴(即ち、経験が常に〈今〉〈ここ〉で起こること、経験に対して心が受動的であること、経験は心を動かす強い力を持つこと)を「経験の〈現実性〉(actuality)」と呼ぶことができるだろう。要するに、印象の消滅的性格・操作不可能性・勢いの強さは、経験それ自体が持つ〈現実性〉の反映なのだと考えられるのである。

しかし、経験の〈現実性〉は印象から観念へコピーされない。観念は持続的であり、操作可能であり、勢いが弱い存在である。結局、印象から観念へコピーされないのは経験の〈現実性〉である。そして、観念にコピーされないということは、思考の対象になりえないということ、即ち、考えることができないということである。他方、印象の特徴に反映されているということは、感じることはできるということである。ヒュームによれば、印象と観念の違いは「感じる」と「考える」の違いと同じものだからである。このように、経験の〈現実性〉は感じることはできるが、考えることはできない。それゆえ、また、経験の〈現実性〉を言葉で語ることもできないであろう。

(3) 経験から知識が生成してくる原点

経験は〈現実性〉という特徴を持っているが、同時に、多くの知識の源泉でもある。しかし、経験が「その都度のもの」であって〈今〉〈ここ〉に留まっている限り、心は経験について知識を持っているとは言えないであろう。なぜなら知識は持続を求めるからである。印象のコピーである観念の持続的性格が〈今〉〈ここ〉からの離脱を可能にする。痛みの単純観念 β が心に現れてもまったく「痛く」ないが、それでも、単純観念 β は痛みの単純印象 α に正確に「類似

している。第2節で述べたように、単純印象と単純観念の正確な類似が、単純印象 α が「何」の印象であるかの認知（即ち、或る特定の痛みを今自分が感じているという認知）を可能にする。そして、第3節で述べたように、この認知があって初めてあらゆる経験的知識は可能になる。しかし、この「類似」とは何であるのか。

複雑印象と複雑観念の間の類似なら、「それぞれを構成する単純印象と単純観念の配列がぴったり対応していることだ」というふうに定義できるであろう²⁰。しかし、単純印象と単純観念については、それを部分に分けることはできないから、そのような仕方の定義はできない。

ただし、単純観念どうし（或いは、同時に現れている単純印象どうし）の類似はそれらを互いに比較すれば認知できる。ヒュームは「単純観念同士にも類似がある」と言う（[T appendix, p.637]）。「青と緑は異なる単純観念だが、青と赤どうしと比べれば、青と緑は互いに似ている」と言う。構成要素を持たない単純観念同士にも類似が言えるということである。しかし、これは観念どうしの類似であって、印象と観念の間の類似ではない。

では、単純印象と単純観念の間の「類似」とは何であるのか。例えば、或る特定の色合いの赤の単純印象と或る特定の色合いの赤の単純観念が類似しているとはどういうことなのか。或いは、或る特定の痛みの単純印象 α と或る特定の痛みの単純観念 β が類似しているとはどういうことなのか。一方が現れると痛い、もう一方が現れても少しも痛くない。しかし、それでも両者が類似していると言われるときの「類似」とは何なのか。痛み（の印象）から痛さを差し引いたら何が残っているのか。これは簡単には答えられない問いである。しかし、ヒュームにとって、この類似は、経験から知識が生成してくる原点に位置している。私たちの経験はすべて時間の中で生じる。他方、知識は時間を超えて妥当することを自ら求める。経験という消滅的なものから知識という持続的なものが生成して来る原点には、印象という消滅的なものと観念という持続的なものの類似がある。この類似それ自体が何であるのか、いかにして成り立っているのか、ということは、ヒュームにおいて問われていない。単純印象と単純観念の類似は、ヒュームにとって、大前提だからである²¹。この問いにどんな答え方ができるかは、ヒューム解釈から離れて、それ自体として追究すべき別の課題であろう²²。

以上、要するに、ヒュームにおける印象と観念の区別は二つのことを明らかにする。第一に、それは、経験の持つ〈現実性〉を際立たせ、同時に、経験の〈現実性〉が思考の対象になりえないということを明らかにする。第二に、それは、経験から知識が生成してくる原点が「消滅的なものと持続的なものの類似」にあるということを明らかにする。

5. 結 論

全体を振り返る。

ヒュームは「観念は印象の正確なコピーであり、両者の違いは勢いの程度だけだ」と言うが、「ヒュームに『一般印象』なるものがないのはなぜか」を検討すると、「印象の消滅的性格と観念の持続的性格」という違いがあることが明らかになる（第1節）。感覚の分解能は言語の分解能より精密であるが故に、今自分の心に現れている単純印象が何であるかを知るために名辞は必ずしも必要ではない。しかし、印象は消滅的であるが故に、単純印象の再認のためには持続する単純観念が不可欠である。また、単純印象が単純観念へ正確にコピーされることはヒュームの大前提なので、ウィトゲンシュタインの「感覚日記」の問題はヒュームにおいて起こらな

い（第2節）。セラーズからヒュームに対する「所与の神話」という批判は、ヒュームが基礎付け主義者でないが故に、当たらない。人間の経験的知識は、知の知を伴う点が動物の知識と異なるが、現前する印象から連合する観念への推移としてのヒューム型推論は動物も人間も行なう（第3節）。印象の「消滅的性格・操作不可能性・勢いの強さ」という特徴は、経験それ自体が持つ〈現実性〉、即ち、「経験は〈今〉〈ここ〉において起こるその都度のものである」、「経験に対して心は受動的である」、「経験は心を動かす強い力を持つ」などの、特徴の反映である。経験の〈現実性〉は印象から観念へコピーされない。しかし、経験から知識が生成してくる原点は、印象という消滅的なものと観念という持続的なものの類似にある（第4節）。

結局、ヒュームにおける印象と観念の区別は、第一に、「経験の持つ〈現実性〉」を際立たせ、かつ、「経験の〈現実性〉が思考の対象になりえないこと」を明らかにする。第二に、「経験から知識が生成してくる原点が、消滅的なものと持続的なものの類似にあること」を明らかにする。

付 論（「記憶の印象」について）

「印象の消滅的性格」という本論文での捉え方と一見矛盾するヒュームの言葉が『人間本性論』にある。この点について検討しておこう。

ヒュームは「印象と他の印象との恒常的随伴」「過去の多くの印象」〔T1-3-8, p.102〕, 「過去の印象の反復 (repetition)」〔T1-3-6, p.88〕, 「記憶における印象の反復」〔T1-3-5, p.86〕, さらには「同一印象の再出現 (return)」〔T1-3-9, p.109〕などの言い方をしている。これらの言葉を見ると、印象の間の習慣的連合をヒュームが認めているようにも読める。とすれば、印象は必ずしも消滅的ではないことになる。しかし、ヒュームの挙げている具体例を見ると、そのような読み方は不適切であることが分かる。その具体例とはこういうものである。即ち、炎を見るといつも熱を感じたという、2つの印象の間の恒常的随伴によって、やがて心は、炎を見ただけで熱を推理するようになる、という例〔T1-3-6, p.87〕である。「炎を見る」というのは視覚印象であるし、「熱を感じる」というのは触覚印象である。これら2つの印象がいつも随伴していた結果、一方の炎の視覚印象が心に現れたときに、熱の触覚印象がなくても熱の観念が心に現れるようになった、即ち、炎と熱の恒常的随伴の結果、心は炎から熱を推論するようになったという例である。確かに、「炎を見て、かつ、熱を感じる」という各々の時点の経験においては両者ともに印象である。しかし、同様の経験が反復するとき、今生じている最新の経験以外は、すべて過去の経験になっている。そして、思い出された熱は少しも熱くないから、それは熱の印象ではなく熱の観念である。このように、過去の印象は印象のままではなく、印象のコピー即ち観念として反復する。したがって、この具体例において、習慣的連合が生じているのはやはり炎の観念と熱の観念の間であろう。結局、これらのテキストは「印象は消滅的だ」ということへの反例にはならない。

ただし、ヒュームは、「記憶の観念 (idea of the memory)」の他に、「記憶の印象 (impression of the memory)」という言い方をすることもある〔T1-3-4, p.83〕, [T1-3-6, p.89]。そもそも、記憶は印象なのか、観念なのか。次の図6を用いて、この点について検討しよう。

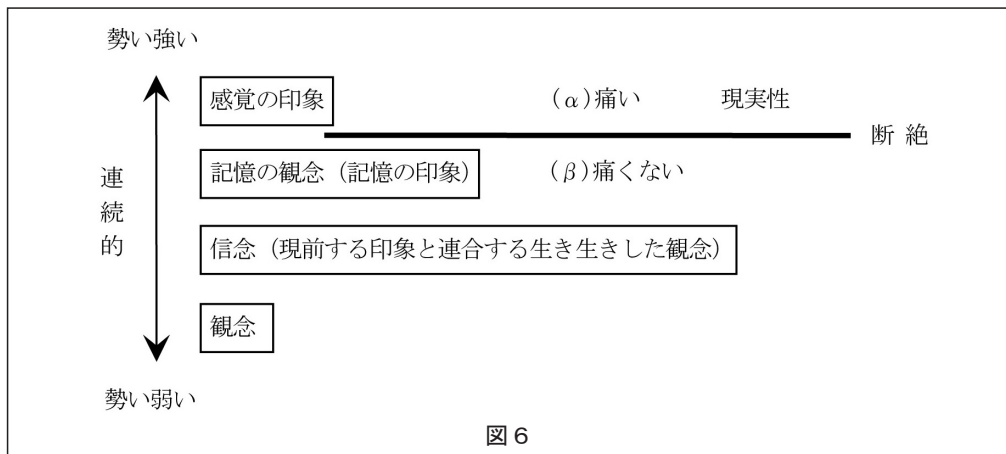


図 6

ヒュームには、感覚・記憶・信念・観念の4つを連続的に捉える観点がある。即ち、勢いの

程度の違いとして捉える観点である。感覚が最も勢いが強く、記憶・信念・観念の順に弱くなる。印象は、一度消えた後に再び現れる際、記憶と想像の2通りの現れ方があるが、想像の場合と違って記憶の場合は勢いが強く、「記憶は印象と観念の間」([T1-1-3, p.8])であるとか、「印象と等価 (equivalent) な記憶観念」([T1-3-4, p.82])という言い方をヒュームはする。しかし、本論文第1節で述べた印象と観念の3つの違い(①勢いの程度、②オリジナルかコピーか、③消滅的か持続的か)のうち、まず、②に関しては、記憶には必ず他の知覚が先行し、それを記憶するものであるから、記憶はオリジナルではなくコピーである。また、③に関しては、記憶した内容がすぐに消滅せずに保持されることは記憶にとって本質的なことだから、記憶は消滅的ではなく持続的である。このように、②③に関して、記憶は印象ではなく観念の特徴を示している。他方、①の勢いの程度については、確かに、記憶は観念より印象に近いと言えよう。しかし、印象の持つ勢いと同じものではありえない。なぜなら、熱の記憶は熱くなく、痛みの記憶は痛くないからである。つまり、記憶の持つ「勢い」は印象よりも「少しだけ弱い勢い」なのではない。もしそうなら、熱の記憶は少しだけ熱く、痛みの記憶は少しだけ痛いということになろう。要するに、記憶の持つ「勢い」と印象の持つ「勢い」とは、程度ではなく質が異なると考えるべきである。

この「勢いの質の違い」という点に関して、信念の場合を参考にしてみよう。ヒュームによると、信念は「生き生きした観念」である。ヒュームは、『人間本性論』第1巻([T1-3-7, p.96])においては、この「生气」は印象の持つ勢いと同じ種類のものであり、程度の違いがあるだけだと述べていたが、(『人間本性論』第1巻、第2巻の翌年に出版した第3巻に付けた)「付録」の中で「観念どうしは、勢い (force) と生气 (vivacity) 以外の感じ (feeling) において異なりうる」([T Appendix, p.636])と述べて、第1巻における信念の説明を訂正する²³⁾。「程度の違い」が「質的な同一性」を前提とするのに対し、「感じの違い」は「質的な違い」を意味する。つまり、信念の持つ「勢い」と印象の持つ「勢い」とは、程度ではなく質が異なるということである。このように、ヒューム自身も「勢いの質の違い」がありうることを認めているのである。とすれば、記憶の持つ「勢い」が印象の持つ「勢い」と質が異なることを認める用意もヒュームにはあると考えてよいのではないだろうか。

以上のように、印象と観念の違い①②③のいずれに照らしても、記憶を印象に分類すべき理由はない。したがって、記憶は印象ではなく観念に分類されるべきだと考えられる。

注

- 1) これは、因果的必然性の観念の元になっている印象である。
- 2) 「T」はヒュームの『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*)からの引用を示す。数字は順にBook-Part-Sectionを表す。ページ番号はSelby-Bigge & Nidditch編の2nd edition, 1978のものである。
- 3) 「force, strength (力, 勢い)」, 「liveliness, vivacity (生氣, 活気)」などの語をヒュームは用いる。
- 4) ただし、印象と観念の「違い」としてでなく、両者の「区別の基準」としては、①②のどちらか一方しか認めないヒューム解釈者もいる。例えば、ワクスマン ([Waxman 1993, pp.75,82]) は①の「勢いの程度の違い」しか基準として認めないし、逆に、スミス ([Smith 1941, pp.209-212]) やランディ ([Landy 2006, pp.119-120]) は②の「オリジナルかコピーかという違い」しか基準として認めない。
- 5) 代表機能を持つ個別観念は、単純観念の場合もあれば、複雑観念の場合もある。
- 6) ヒュームは次の例を挙げる。「三角形」という一般名辞を聞いて、正三角形の観念が思い浮かんだとしても、「三角形の3つの角は等しい」という文を耳にすると、即座に、「二等辺三角形」や「不等辺三角形」の観念が心に浮かび、この文が偽であると判断できる。
- 7) ホップズ ([『リヴァイアサン』2章]) は、慣性の法則になぞらえて、「心は感覚を通して外的物体から運動を受け取り、自らも思考という運動を始めるが、この運動はいつまでも続く」と主張する。ホップズからヒュームへの影響関係 ([黒田 1987, pp.34-41]を参照せよ) は興味深い問題であるが、その検討は別の機会に譲る。
- 8) ただし、ヒュームが、「観念連合の原理は、類似・近接・因果の3つだが、印象の連合の原理は類似だけだ」と言っている箇所もある ([T2-1-4, p.283])。しかし、これは情念についての連合である。「嘆き→失望→怒り→ねたみ→悪意→嘆き」というような、情念が類似の情念を産む例をヒュームは挙げる。本論文の議論は感覚の印象に限定されている。また、感覚の印象がオリジナルな印象であるのに対し、情念は、既に生じている印象や観念から生じる二次的な印象であるから、両者の性格は異なっている。
- 9) ベネット ([Bennett 1971, pp.222-223]) は、「ヒュームは知性的なもの (the intellectual) を感覚的なもの (the sensory) に同化させている」と、(印象と観念の違い①「勢いの程度。観念は弱くなった印象」に基づいて) 主張する。しかし、本論文での我々の議論によれば、ベネットの解釈は一面的である。
- 10) 動物は第3段階 (観念連合) まで到達している。この段階はまだ一般名辞との連合は形成されていないが、個別観念の代表機能は成立している。だから、ヒュームの場合、動物も一般観念を持つことができるのであろう。
- 11) 感覚日記について詳しくは、[入不二 1990]を参照せよ。
- 12) [Sellars 1956, sect.26-29]を見よ。
- 13) 実際には、セラーズ ([Sellars 1956, sect.5,32]) は「非言語的知識」とは言わず「非推論的知識」と言っている。しかし、感覚の認知には言語が必要だとセラーズ ([Sellars 1956, sect.29,31]) が主張しているのも確かである。
- 14) 原文はそれぞれ「smoke here」, 「fire nearly」, 「If smoke anywhere, then fire nearly there.」である。
- 15) ヒュームは「観念」という観念を「二次的観念」と呼ぶ ([T1-1-1, p.6])。また、「印象」という観念や「観念」という観念を手に入れるのは、自分の過去の心の作用を思い出すことによってである、と言う ([T1-3-8, p.106])。
- 16) ホップズ ([『リヴァイアサン』3章~4章]) は、心的談話 (mental discourse) 即ち、思考の連なり

が先あって、これが、言語によって、言語的談話 (verbal discourse) に移されると言う。要するに、ホップズにおいては、思考の方が言語に先行するのである。おそらくヒュームも同じように考えているのではないか。

- 17) 「物体」については[T1-4-2]を、「因果」については[T1-3-14]を、「自我」については[T1-4-6]を、それぞれ参照せよ。
- 18) 人間の本性における想像力や習慣の働きを重視するヒュームには、むしろ「知識の正当化」という問題設定自体への不信感があるのではないか。
- 19) 心は複雑印象に対しても受動的である。心は単純印象を結合して複雑印象を作り出すことはできない。他方、心は単純観念を結合して複雑観念を作り出すことはできる。(したがって、複雑観念は複雑印象のコピーである場合と、心が自ら作り出した場合とがある。) また、心は複雑印象を構成する多様な単純印象を互いに区別することはできる。(例えば、りんごの表面に多様な色合いの赤を見分けることはできる。) しかし、複雑印象を個々の単純印象に分解することは心にはできない。複雑印象は一旦複雑観念にコピーされた後なら、個々の単純観念へ分解することが可能になる。複雑印象のままだと区別はできても分解はできない。
- 20) ヒュームは「観念と印象の組成部分(component parts)は正確に類似している。それらが出現する様式・順序は同じである」と言う ([T2-1-11, p.319])。
- 21) ひょっとすると、ヒュームの場合、人々の心に現れる印象や観念をすべて見渡すことができる視点が暗黙のうちに前提されているのかもしれない。単純印象と単純観念の類似はその視点から見れば自明であろう。この暗黙の視点はロックの「逆転スペクトル」の想定 (『人間知性論』2巻32章15節) にも前提されているように思われる。(もし、この視点がなければ、「スペクトルの逆転」という想定自体が不可能であろう。)
- 22) この問いへの答え方次第では本論文第2節(4)の「感覚日記」の問題が生じる可能性もある。さらに、「経験」概念自体の吟味も必要になるかもしれない。
- 23) この訂正は『人間本性論』から8年後に出版された『人間知性研究』(39節, p.49) においても維持されている。

文献表

- Bennett, Jonathan (1971) *Locke, Berkeley, Hume: Central Themes*, Clarendon Press.
- Berkeley, George (1712) *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge*, 1957, edited by Colin M. Turbayne, Bobbs-Merrill. [『人知原理論』]
- Hobbes, Thomas (1651) *Leviathan*, 1996, edited by Richard Tuck, Cambridge University Press. [『リヴァイアサン』]
- Hume, David (1739-40) *A Treatise of Human Nature*, 1978, edited by L. A. Selby-Bigge, 2nd ed. revised by P.H. Nidditch, Clarendon Press. [『人間本性論』]
- Hume, David (1748) *An Enquiry concerning Human Understanding*, in *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals by David Hume*, 1975, edited by L. A. Selby-Bigge, 3rd ed. revised by P. H. Nidditch, Clarendon Press. [『人間知性研究』]
- 入不二基義(1990)「私的言語論における言語ゲーム—『哲学探究』257節、258節、261節の解釈を中心に—」哲学会編『哲学雑誌』第777号, pp.199-216。
- 黒田亘(1987)「言語論の素描」日本イギリス哲学会監修『デイヴィッド・ヒューム研究』御茶の水書房, pp.25-48。
- Landy, David (2006) "Hume's Impression/Idea Distinction," *Hume Studies*, Vol.32, No.1, pp.119-139.
- Locke, John (1689) *An Essay concerning Human Understanding*, 1975, edited by P. H. Nidditch, Clarendon Press. [『人間知性論』]
- Meyers, Robert G. (1981) "Sellars' Rejection of Foundations," *Philosophical Studies*, vol.39, pp.61-78.
- Sellars, Wilfrid (1956) *Empiricism and the Philosophy of Mind*, 1997, Harvard University Press.
- Sellars, Wilfrid (1981) "Mental Events," *Philosophical Studies*, vol.39, pp.325-345.
- Smith, Norman Kemp (1941) *The Philosophy of David Hume*, Macmillan.
- Waxman, Wayne (1993) "Impressions and Ideas: Vivacity as Verisimilitude," *Hume Studies*, Vol.19, No.1, pp.75-88.
- Wittgenstein, Ludwig (1953) *Philosophical Investigations*, 1958, 2nd ed. Blackwell. [『哲学探究』]

※本論文は第19回ヒューム研究学会(2008年9月11日~12日, 岡山大学)における口頭発表「印象とは何であるか」の発表原稿に加筆修正したものである。様々なご指摘をくださった参加者の皆様に感謝申し上げたい。

(2008年9月26日受理)